

む つ み

2 8 5

日本国語教師の会「樺の会」

第五十六回 日本国語教師の会「樺の会」東京WEB大会 案内号

日本国語教師の会「樺の会」東京WEB大会

一 主題 ことばを育て人間を育てる

～これから先の国語の教室を考える～

主催 日本国語教師の会「樺の会」

【HP】 <https://www.keiyakikokugo.com>

新学習指導要領での教育課程が全面実施となった昨年度でしたが、コロナ禍下での一斉休校と新しい生活様式、オンライン授業に備えたGIGAスクール構想など、今までと違うことの連続と向き合っていくことを余儀なくされました。そして、並列するこれらの課題との向き合い方が、「これからの国語授業をどのように展開していくべきか」という根本的な問題につながっていることに気づかされました。

そこで本大会では、カリキュラムマネジメントやICT機会の活用、そしてこれまでと変わらず国語教育で大事にしたいことなど、「これから先の国語の教室」を考える上での実践やお考えを交流する機会にしたいと考えています。ご参加をお願いいたします。

なお、昨年度予定していた陸前高田復興大会は、コロナウイルス感染の拡大防止のため中止とし、令和五年度に延期いたします。

二 とき 二〇二二（令和三）年八月七日（土）

一〇：〇〇～一六：〇〇

三 ところ（事務局） お茶の水女子大学附属小学校

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

※大会はZoomによるオンラインで開催します。申し込まれた方にURLを配信いたします

四 日程

【午前の部】八月七日（土） 一〇：〇〇～一二：〇〇

○ 入室準備 九：四〇～一〇：〇〇

1 開会式 一〇：〇〇～一〇：一〇

① 開会のことば 大会事務局 若林 富男（東京）

② 大会運営の連絡 大会事務局 廣瀬 修也（東京）

2 はじめの話 一〇：一〇～一〇：三〇

大会委員長 片山 守道（東京）

3 実践報告分科会 一〇：四〇～一二：〇〇

◆ 下学年分科会 司会 佐久山有美（東京）

「スタートカリキュラムから学ぶ国語授業のこれから」

発表者 安藤 浩太（東京）

特別発言者 成田 信子（神奈川）

◆ 上学年分科会 司会 廣瀬 修也（東京）

「個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指して」

発表者 吉野 竜一（埼玉）

特別発言者 黒田英津子（静岡）

【午後の部】八月七日（土） 一三：三〇～一六：〇〇

○ 入室準備 一三：一五～一三：三〇

4 パネルディスカッション 一三：三〇～一五：〇〇

「ことばの力を育むICT機器を活用した学習づくり」

パネリスト 内丸 友之（茨城） 曾根 朋之（東京）

渡辺 光輝（東京）

5 まとめの話（総括講演） 一五：一〇～一五：四〇

濱田 芳子（神奈川）

6 閉会式 一五：四〇～

・ 会代表挨拶 安田 恭子（東京）

・ 参加者代表挨拶 大木 圭（千葉）

・ 大会連絡 若林 富男（東京）

五 研究発表等 分科会実践報告（八月七日午前）発表者とパネ

ルディスカッション（八月七日午後）のパネリス

トは、大会事務局より依頼して決定いたしました。

発表とパネリストの資料は、A4用紙を縦長

縦書き二段組で、七月二三日までに申込先メール

アドレスへお送りください。

○ 昼食 一二：〇〇～一三：一五

六 参加費等 大会参加費は無料 大会申込は必要

※ご希望の方には、大会冊子を一冊一〇〇〇円
(印刷費・送料) で、後日郵送します。

七 申込方法 ① 「こくちーず」からの申し込み

https://www.kokuchipro.com/event/keyaki_tokyo/

② メールでの申し込み

【メール】 info@keyaki-kyokugo.com

※メール本文に、氏名・所属・アドレス・大会要項
(冊子) 希望の有無を記入してください。

八 申込〆切 八月五日(木)

【大会役員】

大会委員長 片山 守道 (お茶の水女子大学附属小学校)

大会事務局長 岡田 博元 (お茶の水女子大学附属小学校)

大会事務局 飯塚 健太 (さいたま市立大谷口小学校)

佐久山有美 (お茶の水女子大学附属小学校)

下脇 陽子 (お茶の水女子大学附属小学校)

鈴木まゆ子 (板橋区立蓮根小学校)

廣瀬 修也 (お茶の水女子大学附属小学校)

横内 智子 (前・お茶の水女子大学附属小学校)

若林 富男 (前・江戸川学園取手小学校)

【実践報告】

文章と向き合う主体を育む「ねかせ読み」

片山 守道 (お茶の水女子大学附属小学校)

一 ねかせて読むということ

1 はじめに

五月の樺の会第五〇五回例会で、飯塚健太先生が「児童の読
みを深めるための指導と工夫」というテーマで「ねかせ読み」
を取り入れた六年生『川とノリオ』の実践発表を行った。

「ねかせ読み」って何? という、多くの参会者の疑問に答え
るべく、私が第五三回伊豆熱川大会で発表した「ねかせ読み」
の構想と意義について改めて論じたい。

2 へ読みへの学習の難しさ

「読む」という行為には様々な目的や魅力があるが、その大
きな魅力の一つとして読書の愉しみがある。そして、読書の愉
しみを感じるためには豊かな読書経験を積んでいく必要がある。
そのためにも、日々の国語授業で「読み」の実感をもてるよう
な場をつくっていきたい。国語の授業で取り上げる多くの文章は、
一度読めば大意はつかめるものであり、小学生の学習者でも、自
分なりの「読み」をつくることができる。しかしながら、情景から
心情を想像したり、行間を読んだり、伏線に気づいたり、など作
品を深く読み味わうというところには至らず、大人から見れ
ば浅い読みでも、納得し満足してしまっている学習者も多い。授

業でそういった幅広い読みや深い読みの可能性を示し、気づきを促しても、漠然と理解した気になりながらも、腑には落ちておらず、十分に消化しきれないままに終わってしまうことも多い。

一読しただけで「分かった!」と違って終わるのではなく、さらなる読みができるのではないかと追究していく姿勢を培いたい。その先に実感のある読みが生まれるのではないだろうか。

3 読みを熟成させる「ねかせ読み」

(1) 「ねかせ読み」とは

文章を書くことにおいて、一度書き上げて納得したはずの文章でも、数日経って読み返してみると修正したくなってしまうことは、ままあることである。それは、書いた時の書き手としての思いを一度リセットして、読み手の立場で冷静に読み返すことができるからではないだろうか。そうした利点を生かして、あえて時間をおいて推敲していく活動が組まれることは多く、そうすることで文章は練り上げられ、より洗練されたものとなってくる。

同様に、私たちの読書生活において、以前読んだ本を時間をおいて読み直してみると、改めて作品世界の魅力に引き込まれたり、新たな作品の魅力に気づいたりすることがある。読書経験を重ねる中で、こうした再読を経験し、その意義や魅力を体感したことは、大人ならば少なからずあるだろう。これは、再読により自己の読みと向き合い、対象化することができ、自己内対話が生まれるからではないだろうか。

実際、初読と再読では読みの構えが変わる。初読の際は、それま

での読書経験や生活経験などから自分なりのスキーマで先の展開を予想しながら読んでいく。それに対して、再読では、結末まで理解した上で、出来事や描写の意味や関連性などを捉え直しながら叙述の細部にまでこだわって読むことになる。

しかしながら、意図的・計画的にそうした再読の活動を取り入れた授業実践は、管見の限り見当たらない。そこで、一度学習している文章を学習材として、時間をおいて（ねかせて）再読し、自らの読みを問い直す学習を「ねかせ読み」（稿者造語）と名付け、「ねかせ読み」を取り入れた授業づくりに取り組んできた。

このように「ねかせ読み」とは、一度読んだ作品を時間をおいて読み直すことである。「ねかせて」再読することで得られる感動や新たな作品の魅力への気づきは、その間の、人生経験や読書経験が生きているとも考えられるが、では、「ねかせ読み」までの間に何かしらの人生経験や読書経験を積まなければ、そのような感動や気づきは得られないものなのだろうか。決してそういうことはなく、一度作品から離れて、頭をリセットした上で読み直すこと、即ち「ねかせて」読み直すこと自体に、自分の読みを客体視して捉え直して読むことになるという大きな意味がある。

一度作品から離れた上で読み直すことに最大の価値があるので、その間に特別な手立てなどは講じないことを旨と考えている。

(2) 再読と「ねかせ読み」

一般的に言われる再読と「ねかせ読み」はイコールではない。では、相違点は何なのか。

国語辞典を引くと、再読については、左記の通り書かれている。

再読 ふたたび読むこと。くりかえし読むこと。（広辞苑第六版）

再読は、既読の文章を読むこと全般を指す言葉なので、言い換えれば、初読以外の、同じ文章を何度か読む行為は全て再読ということになる。従って、一連の学習の中で、何度も繰り返して読む行為も再読と呼ぶことができる。

それに対して、「ねかせ読み」は前に読んだ記憶を持ちつつも、しばらく時をおいた後、改めて読み直すことを指す。

二読法で言うところの「精読」をした後の「味読」で、自分の読みをまとめても、それは、その一連の学習で得つつある、謂わば「未消化な状態の」読みである。単元を終えて、いったん頭を切り換えて他の経験をした後、改めて読み返してみると「自分なりに消化した」読みをメタにとらえることができ、そこにどのような理解や気づきがあるのか（あるいは未消化な部分があるのか）を自ら振り返っていくことができるはずである。そこにこそ「ねかせ読み」の意味がある。

（3）「ねかせ読み」の意義

「ねかせ読み」からは、初読のような先がどうなるかという期待感や思わぬ展開に対する驚きなどの新たな作品との出会いによる感動は生まれにくい。そのため、読書の魅力をドキドキ感・ワクワク感や作品に感じる新鮮さと捉えている子は、もの足りなく感じる面もある。しかし「ねかせ読み」には、作品への愛着を深めながら安心感をもつてじっくり読み込める良さがある。時間をおく

ことで、自分の以前の「読み」と自己内対話しながら「読み」を熟成させ、更新していくことができる。この読書行為の中に、文章と向き合う主体性が育まれていくのである。

これまで、学年や教材など対象を換えて何度か「ねかせ読み」の授業を試行してきている。どの学年でも、学習前に「ねかせ読み」のような再読経験のある子は多くないが、実際に「ねかせ読み」に取り組んでみると、「読み」の変化や深まりを実感する子は多く、「他の作品もねかせ読みしてみたい」といった読書意欲の高まりも見られる。「ねかせ読み」を通して読書の視野を広げ、そうした再読の意義と面白さを体感してほしい。

読むことの学習を登山に例えるならば、通常の学習では、未読段階の麓から、学習のゴールとなる山頂（作品の確かな読み）まで、既習事項という読みのツールを用いながら、限られた時間の中で登っていくことになる。

読書経験や読みの力の差異は、登山経験や体力の違いと同じように、読みの登山に影響する。読み応えのある

作品では、教師や級友のサポートによりなんとか登り切ったとしても山頂の景色を味わう余裕がなかったり、途中の山道で息切れして登り切れなかったりする子もいるであろう。一方、「ねかせ読み」という再登山では、初読の経験を経て、五合目辺りからのスタートとなり、山頂までの道のりも分かっているため、周囲の自然を楽しむ余裕もできる。山頂でも周囲の景色を楽しむ余裕もで



き、登頂の喜びを味わうことができる。

このように、読むことを楽しむ実感を期待できることが「ねかせ読み」の最大の魅力と言えよう。

二 「ねかせ読み」を取り入れた授業づくり

1 ふさわしい学習材

読み応えがあったり読むほどに味わいが深まるような作品ほど「ねかせ読み」にふさわしいと思われる。例えば、左記のような文学作品は、「ねかせ読み」向きなのではないだろうか。

一年 「あいしているから」「お手紙」

※太字は実践済

二年 「きつねのおきやくさま」「スイミー」「スーホの白い馬」

三年 「わすれられないおくりもの」「ちいちゃんのかげおくり」

「モチモチの木」「手ぶくろを買いに」

四年 「ごんぎつね」「二つの花」

五年 「大造じいさんとガン」「注文の多い料理店」

「わらぐつの中の神様」「雪わたり」

六年 「海のいのち」「やまなし」「きつねの窓」「川とノリオ」

2 ねかせる期間

どれだけの期間をおけば「ねかせ読み」となるのか、明確な基準があるわけではない。これまで、最短一ヶ月、最長四年という間隔で、様々な期間を変えた実践を行ってきたが、「ねかせ期間」はどの程度が適当なのかを結論づけることは難しい。ただ、学習として、より「ねかせ読み」の効果を高めるには、以前に読んだ記

憶のある範囲で、約半年〜二年程度おくのがよいように感じている。それは、ある程度期間を置いたことで新鮮な思いで読めると同時に、以前に読んだ記憶も明確に残っていて、自分の「読み」の変化を実感できる、短すぎず長すぎない期間である。

3 単元構想の留意点

「ねかせ読み」する教材は、通常、時間を掛けて既習しているものなので、あまり時間を掛けず、二〜四時間程度でポイントを絞って読み込むことが望ましいだろう。年度内、同学年で計画的に「ねかせ読み」を取り入れるのなら、初読時の学習を予定の八割程度の時間で済ませ、残りの二割に一、二時間を加えて「ねかせ読み」の時間を取れるとよいのではないだろうか。

私が「ねかせ読み」に取り組む際は、「ねかせ読み」をする最初の時間に、ガイドランスとして「ねかせ読み」の魅力や可能性を伝えた上で「ねかせ読み」する作品を明らかにし、その時点での、作品の「読み」や印象について書かせるようにしている。「ねかせ読み」後には、感想や初読時との比較、新たな気付きや疑問を丁寧に書きまとめさせたい。その中から、主題に関わる辺りにポイントを絞って、自分の「読み」を見つめ直すとともに、話し合いながら読み込んでいき、改めて「読み」を書きまとめていくと、主体的に文章と向き合っている姿を見ることができている。

なお、「ねかせ読み」を通して、「読み」の変化はない、という実感をもつ子も多い。印象や感想は変わらないが、ちよつとした気付きが生まれたといった「読み」の深化を大切にしていきたい。

三 「ねかせ読み」の効果と可能性

1 実践を通して見えてきたこと

「ねかせ読み」の授業を重ねてきて、授業における子どもたちの「読み」や反応から、対象を問わず共通して見られる手応えがある。それらはおおよそ以下のような学習効果としてまとめられる。

- 以前に作品を読み、概ねの内容理解ができていたので、難語句や細部の描写を捉えることなどに戸惑ったりつまずいたりすることなく、作品の本筋を精査し、しっかりと捉えることができる。
- 展開や結末が分かっているため、それぞれの場面における人物の言動の意味や心情、人物像や関係性などを叙述をふまえて想像したり考えたりしやすい。
- 作品の大枠を捉えようとするのではなく、その機微へ関心が向くので、微細な表現の差異に思いが至ったり、伏線に気付いたりすることができるといえる。
- 以前の「読み」を客体視し改めて自己内対話しながら再構築した自分の「読み」は、確かさを感じることができ、より深く読めたという実感や「読み」に対する自信をもつことができる。
- 改めて自分の「読み」を捉え直し作品の面白さを味わうという読み込む行為の楽しさを実感でき、他の作品も読み返してみたいという次なる読書意欲が高まる。

また、授業者も「ねかせ読み」を前提に単元を構成すると、一度目の学習で「ここまで「読み」を引き上げなければ」といった見えない責務から解放され、子どもたち一人ひとりの今の「読み」と向き合い、受容的に捉える余裕ができる。この「ねかせ読み」を見通すことによる授業者側の意識の変容も一つの成果と言える。

2 「ねかせ読み」の可能性

「ねかせ読み」を経験した子どもの日記に、「家の本だなにあった本を「ねかせ読み」してみました。小さい時に読んだ時よりもおもしろくて、主人公の気持ちがよく分かりました。また「ねかせ読み」をしてみようと思います。」といった記述があった。こうした日常的な読書意欲につながっていくことを願っている。

一方で「ねかせ読み」には、まだまだ未整理な部分も多い。「ねかせ読み」の定義や効果など、さらに理論構築し、今後も検証授業の工夫と、実際の子ども「読み」の分析に努めたい。具体的には、次の五点を今後の課題として挙げる。

- 最初の単元で取り組むべき学習 育てておきたい「読み」の力は？
- 「ねかせ読み」により生まれる（新たな）学び・成果とは？
- 時間数及び時間配分（単元構成）の考え方
- 「ねかせ読み」を学習に取り入れる際の留意点の整理
- 文種による「ねかせ読み」の違い。説明的文章における可能性は？

「ねかせ読み」に取り組んでみると、教師も子どももその手応えを確実に感じることができる。子どもたちは「ねかせ読み」を取り入れた学習で自分の「読み」と向き合うことを通して、読み込むことの楽しさを実感することができ、「読むこと」の奥深さに触れ、読書への関心が高まっていく。ふだんの国語学習では、なかなか文章と向き合えない子どもも抵抗なく文章と向き合い、自分なりの「読み」をつくり、自信をもって気づきや考えを表現する。無理なく「読み」の主体となる経験をすることができるのである。

飯塚実践のように「ねかせ読み」を「問題作り学習」と結びつけることにより、問題の質が変わってくる可能性もある。

樺の会員による、「ねかせ読み」の発想をアレンジして計画的に組み入れた、創造的な実践の展開を期待している。

◇◇ 会案内 ◇◇

日本国語教師の会「樺の会」の研究でめざすもの

日本国語教師の会「樺の会」は、二十一世紀の国語学習の在り方の探求する研究集団である。

子どもたちが「自ら国語の力を獲得する学び」の姿を求めて、東京、千葉、埼玉、神奈川、茨城などから会員が都内の会場校に集まってくる。若手から中堅、そしてベテランまで、幅広い層の教員が、常に三十名前後参加している。

『研究は厳しく、人間関係は和やかに』を合言葉に毎月一度集まり、互いに学び合っている。二〇二一年には月例会が通算五〇〇回を超え、二〇二二年一〇月には祝賀会を予定している。

日本国語教師の会「樺の会」は、故石田佐久馬代表の遺志を引き継ぎ「吾以外皆我師」をモットーに学び続けている。月例会で「学んだこと」とに、日本国語教師の会「樺の会」の全国大会(毎年七月〜八月)で、発表する会員も多い。

近年五年間の日本国語教師の会「樺の会」の全国大会の研究テーマを掲げると、次のようになる。

二〇一五年 第五十一回 多摩東京大会 (東京都立川市)

ことばを育て人間を育てる (どの子も輝く国語の教室)

二〇一六年 第五十二回 茨城取手大会 (茨城県取手市)

ことばを育て人間を育てる

～自ら学び、みんなで学ぶ国語の教室～

二〇一七年 第五十三回 伊豆熱川手大会 (静岡県東伊豆町)

ことばを育て人間を育てる (国語科における「深い学び」とは)

二〇一八年 第五十四回 宇都宮大会 (栃木県宇都宮市)

ことばを育て人間を育てる

～学び続ける主体を育てる国語の教室～

二〇一九年 第五十五回 横須賀大会 (神奈川県横須賀市)

ことばを育て人間を育てる

～主体的・対話的に学びを深める国語の教室～

二〇二〇年は、陸前高田復興大会を計画していたが、新型コロナウイルス感染防止のため、開催中止とした。

日本国語教師の会「樺の会」の会員は、全国大会のテーマを常に意識しながら、自分で興味関心のあるテーマを設定し、授業実践を通して追究し、年一回月例会で提案することを申し合わせている。